

るものあり、隔てなき師弟の關係意は言外にありとす、而して興未だ盡きざるに、日已に傾き道愈く遠し、五時に近く散會す、

密かに思ふ師弟に於ける懇情切意、於之乎全きといはざるべからず、我等が主義は高尚なるところにあり、質素なるところにあり、誠實なるところにあり、而して然も無邪氣なるところに存す、必ずしも其間一點の邪氣も、一片の猜疑をも含まざるなり、世の徒らに虚禮に走り佞媚をこととする輩と同一ならざるなり、苟も自然を憧憬し美神の懷に抱擁せらるるもの、亦如此ならずして可ならんや、或は亦世の所謂似而非藝術家なるものあり、詩を作るも繪を賞するも、眞に此等の點を解せざるもの多々也、華奢傲慢の士は權勢のものと雖も我等は與せず、今一日の清會、佳肴を吻まず、婀娜を擁せざるも、悠々として我事足れり矣、

(はん)

日も昏れたれば、急げや急げと、疾驅して下るに、だらだら下りの坂道にして、路も埋まるばかりにオンパコ叢生したれば悦



野花 大藤次郎筆

ぶこと限りなし、凡そその畔なると堤たるとを問はず、オンパコは必ず人に踏まれたる土ならでは、生えぬものなれば、路に迷ひたる人は、オンパコを道知るべの草として、その在るが方へ迎れば、人里に出ですといふことなし、云々。

これは小島烏水氏の槍ヶ嶽探險記の一節なり、旅行家は心得置くべきことと思へば茲に借用す。(編者)

夫れ葉も縁なり、蔓も翠なり、其は天地皆一青のみ、我おもふに、若し色そのものに重量ありとすれば、青は最も重かるべし、濃ければなり。今見わたす限り、村家の軒を這ふ絲瓜も青く、垣に巻舒する零餘子も青く、たゞその間に離々點々、鳶色の藁屋根を露はすのみなれど、それすら闇きほどに縁を浴びて、中に棲まへる人は蠢々として芋蟲の如く青からんとす。其の大地はこの億萬斤の重量に堪へて、能くみじろかざるなり、我は天の崇高を説くものにして、何故に地の壯嚴を讚嘆せざるかを恠しむ。(山水無盡藏)